



産土



彦島八幡宮社報
第 62 号



無形民俗文化財「サイ上り神事」(フォトメッセンジャー-中野 英治氏 撮影)



「三幸実践(さんこうじせん)」の
日々を過ごしましょう

宮司 柴田 宜夫

令和五年の清々しき新年を寿ぎ、謹んでお慶びを申し上げます。

皆様、「幸せ」は、三つあるということを御存知ですか。一つは、「してもらう幸せ」、二つめは、「できる幸せ」、さらに、三つめは、「してあげる幸せ」です。私共は、目には見えない大きな力、神様、大自然の恵み、沢山の方々の支えによって、生かされて生きています。今ある命は、「してもらう幸せ」の賜物と、感謝の心を忘れてはなりません。そして、「トライ アンド エラー」の繰り返し毎日ではありますが、謙虚に自分を見つめ直し振り返ると、「できる幸せ」が実感できます。そして、「してもらう幸せ」に感謝し、謙虚に「できる幸せ」をかみしめながら、「悲観は気分 樂觀は意志」、希望を見失うことなく、しなやかに知恵を借り工夫をして、落ち着いてゆとりをもって、「してあげる幸せ」を励行することを心がける、これこそが、まさに、「三幸実践」の日々であります。

私たちは、自分にとって都合の良いものは「良い出来事」、都合の悪いものは「悪い出来事」と、自分の秤(ばかり)である、「損か得か」という人間のものさしで判断してしまうのです。「産土百首(うぶすなひやくしゅ)」を著作(ちよさく)された本田親徳(ほんだ ちかあつ)という江戸時代の神道家(しんとうか)は、「音に聞き 眼にみえるものことごとく 産土神(うぶすながみ)の 御身(みみ)にこそあれ」と詠(よ)まれています。今、目の前に起こるすべての出来事は、神様のお力によるものだと、恐れ敬い、謙虚に受け止めて、向き合うことが大切なのではないでしょうか。人生で意味のない出来事は、一つとしてないのです。しかも、良い出来事は、日々の暮らしのエネルギーになりますし、悪い出来事は成長の糧(かて)となりえます。「起きてくるものはすべてよし」と、「嘘か誠か」、「正義か邪悪(じゃあく)か」という神様のものさしで向き合えば、「前向きに人生を楽しむ」という神社神道の信仰の柱にもつながります。「三幸実践」で、この新しい年も、幸せに満ちあふれた日々でありますように、心からお祈り申し上げます。

八幡宮からの重要なお知らせ「詳細は次頁参照」

どんど焼きは令和五年より制度が改訂されます

どんど焼きは 一月十五日(日) 午前十時頃 忌火火入式

※荒天の場合は 一月 二十日(日) に順延します。



どんど焼きが廃止の危機を迎えています
伝統の火祭り「どんど焼き神事」継承にご協力願います

令和五年より行政・消防の指導、環境問題等、様々な要因を考慮し左記の通り大幅な改定を余儀なくされました。ご理解ご協力の程を宜しくお願い申し上げます。時勢大変厳しく、従前通りの内容では継続困難となりました。次世代に継承していく伝統的な神事・伝統文化の廃止取り止めだけは何としても回避すべく、苦渋の決断となりました。

小規模でも継続していくべく種々努めて参りますので、何卒ご高配賜りますようお願い申し上げます。

① 正月期間中の古神札納所は分別となります。

納所解体後は、社務所に直接お持ち下さい。

※御神札、御守、破魔矢、熊手、縁起物、土鈴の種類です。

② 正月飾りはどんど焼き当日のみ正午までの受付となります。

※正月飾りは、小正月(十五日朝、もしくは十四日夜)に取り外して下さい。正月飾りは、どんど焼きの前日、終了後も受付できません。

※みかん(だいたい)・針金を取り外していない正月飾り類のは受付できません。

※ビニール袋等不燃物は必ずお持ち帰り下さい。

③ 受付できないもの

※鏡餅・鏡餅プラスチック空箱・授与品以外の不燃物・人形・仏具・民芸品等

【注意】

神社で授与した古神札・御守等の授与品は、一年中社務所で受け付けております。



令和五年二月三日(金) 節分祭追儺式のお知らせ

★新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、豆まき餅まき・福引大会は中止します。代わりに終日「福豆」「福餅」をお一人様につき一袋ずつ無料にておわかち致します。詳細はホームページやインスタグラムをご覧ください。

●節分祭追儺式(神事)は、従前通り午後五時四十五分開式にて執行します。

●厄祓も終日受け付けます。(予約不要)

●「福豆・福餅のおわかち」を終日実施します。

●花手水開催します。

●恵方巻を有志にて販売します。





宮司プレス総集編

※181号～192号(要点抜粋)を総集編としてお届けします。
全文ご覧になりたい方は八幡宮ホームページへアクセスしてください。

第一八一号(令和三年十二月十七日)

◇私は、来年、還暦を迎えますので、実は、今年は、前厄年でありました。前述した、「三つの幸せ」に気づかされたわけでありまして、「苦難は幸福の門」、飛厄の年にしていかなければなりません。今号は、私事で紙面がうまりそうですが、私が、生を享(う)けたのは、昭和三十七年七月二十七日午後三時のことでした。溺死した長兄の、そのグリーフケア(悲嘆からの回復)のさなか、よくぞ、私を産んでくれたと感慨深いものがあります。しかも、母は、過酷なお産に、生死を彷徨ったそうで、「人は神様のお力によって生かされている」、その母の口癖は、私の神職としての縁(よすが)でもあります。人生の長さは、徒然草にも、「四季は定まれる序(ついで)あり死期(しご)は序を待たず」と認められているように、自分では、決められません。しかし、「存命の喜び日々に乗しまざらんや」とも書いてあるように、人生の幅は、自分の意志で、豊かにできるのではないかと考えます。マハトーマガンジーは、「明日死ぬつもりで生きなさい永遠に生きるつもりで学びなさい」と論されました。今日は、残りの人生の始まりの日、この瞬間、今ある命を大切にしたいと思えます。これからも、日本人の伝統的信念である、神社神道を伝える、誇り高き使命を果たしてまいります。そして、「してもらう幸せ」「できる幸せ」を謙虚に受け止め、感謝の心を忘れず、「してあげる幸せ」の実践の日々を過ごしてまいろうと思えます。

第一八二号(令和三年十二月二十一日)

◇和服のことを、呉(ご)の国から渡来した織り方から由来して、「呉服」ともいいます。中国の古典「書経」の中の言葉である「五福」とも同音です。その「五福」とは、ひとつは、「長寿」、二つめは、「豊かな暮らし」、三つめは、「無病健康」、四つめは、「徳を好むこと」、善き思い、善き行い」、五つめは、「天命を以て終わること、つまり、命ある限り活き活きと暮らす」の五つです。したがって、私共は、五福を招く余装いで御奉仕申し上げているわけです。氏子崇敬者の方の「五福」を願って、御奉仕申し上げます。思いを新たにしています。

◇さて、来年の干支は、壬寅(みずのえとら)年です。六十通りある干支の組み合わせ、甲子(きのえね)から数えて三十九番目の干支です。壬寅は、「じんいん」と読みます。「壬」は、「はらむ」を語源とし、新しいものがはらまれる状態を表しています。「寅」は、「うごく」という意味で、草木が発生する状態を表しています。「壬」も「寅」も、暗がりから明るい日差しが差し込む、「陰」が「陽」に転じる様子を表しているといえるでしょう。来年、長引くコロナ禍で、暗い影に覆われた社会に、明るい光が見えてくる、壬寅の干支に肖りたいものです。動物では、「虎」があらわれています。「虎(トラ) イアンドエラー」を繰り返しながらも、「虎は千里を走る」に肖り、「虎(トラ)ブル」のないよう、何事にも、じっくりと取組んでまいりたいものです。例年、干支にまつわる「書初め」を色紙にしたため、お頒ちしています。今日と、新年を迎えた明日とで考えなければなりません。「処」の旧字体に、「虎」に似た字が使われています。「處」という字です。この字を使ってみようかと思案中です。

第一八三号(令和四年一月十日)

◇今年の書初めは、「祥寅(しょういん)」、「福壬(ふくじん)」、さらに、「立処皆真(りつしよみなしんなり)」と浄書しました。「祥寅」は、前述したように、様様なことに挑戦し、放たれた矢が、「祥、幸せ」に、つながりますようにという願いをこめて認めました。「福壬」は、皆さんの幸福がうまれますようにと願ひ認めました。「祥寅」「福壬」、いずれも私の造語です。「立処皆真」は、臨済宗臨済録の言葉です。元寇という国の存亡にかかわる危機的状況のなか、時の執権、北条時宗は、国家鎮護を祈り、臨済宗の本山である円覚寺を建立しました。元寇から、日本の危機を救ったのは、臨済宗のお力によることと生懸命取組みな今、与えられたことに「生懸命取組みなさい、きつと、すべて上手くいきますよ」という教えです。「処」の旧字体が、「虎」に似た字で、「處」なので、認めました。

◇コロナ禍は、秋以降、にわかには落ち着いていたのですが、最近、感染拡大の第六波が押し寄せています。これまで、人類が「根絶」できたのは、「天然痘」だけだそうなんです。それも、天然痘が、人にしか感染しないという特徴が、根絶を可能にしたそうなんです。公衆衛生意識が高かった日本人の行動変容が、第五波収束の大きな要因にあげられています。今しばらくは、まだまだ、行動変容、生活変容が継続します。しかしながら、今年の干支の色紙の書初めに肖り、「立處皆真」、やるべきことを全力でつくし、様な取組も的(まと)を得て、「祥寅」、幸福がたくさんうまれる「福壬」となります。心からお祈り申し上げます。

第一八四号(令和四年一月十二日)

◇立春の名称には三つあると御存知でしたか。本年の立春は、「新年立春」でありました。旧暦では、元日と立春の日付が、最大で半月ほどずれていたのです。

◇「新年立春」とは、旧暦の元日を迎えて立春を迎えることで、本年も含めほとんどの立春は、この「新年立春」です。ところが、旧暦の元日を迎えずに立春を迎える年がございます。これを「年内立春」といいます。そして、三つめが、「朔旦(さくたん)立春」です。元日が立春に当たるといって、「立春正月」ともいわれ、大変、おめでたい日とされてきました。

◇余談となりますが、伊勢の神宮さんは、二十一年に一度、御社殿等神宝類、すべてお建て替え新調されますが、これを式年遷宮といえます。旧暦の十二月二日が冬至に当たる日のことを、「朔旦(さくたん)冬至」といいます。この日は、最大で最強の吉日とされ、天皇陛下は紫宸殿に出御されお祝いをされました。ほぼ十九年に一度のことで、この周期に基づき二十年と定められたとされるのが、「原点回帰説」とされる、「朔旦冬至」の周期なのです。

◇何気ない日常の暦のなかに、御先祖様方の様々な思いや祈りが込められていること、あらためて驚かされます。昨今は、「ハッピーマンデー構想」なるもので、祭日祝日が休日化しています。まさに、古き良き時代の「しきたり」「儀礼文化」「生活の古典」が失われていくような気がしてなりません。

◇諸祭、遺漏無く、厳かに執り修めることが、「生活の古典」を継承し、さらに、「共に集まる」、「共生の場」を見失うことのない、私共のつとめではないかと、思いを新たにしています。御自愛を祈ります。

第一八五号(令和四年三月十二日)

◇今、まさに、「三寒四温」の季節です。この「三寒四温」という言葉は、毎日に春めいてまいる日々のであり、少しづつ物事がよくなっていくことにも例えられるのではないかと思います。

◇忘れてはならないのが、実は、「戦間期」をも生きているのだということです。地球人類の有史以来、争いや紛争、いわゆる戦争が、全くなかった時間を合計しますと、二百年間しかないそうです。今年、わが国は戦後七十七年となりますが、この時間は、とても尊く貴重な時間です。「随所主作立所皆真(ずいしょしゅとなればりつしよみなしんなり)」、「今、与えられたことに全力をつくしなさい、そうすれば、必ずすべてうまくいくよ」という意味です。うまく事が運ぶことを願い、今、与えられたことを完遂するしかないのではないのでしょうか。

◇私は、「三寒四温」を「三感四恩」と置き換えています。「戦間期」さらに「災間期」を生きている私共、今ある命に、「感謝」をし、身のまわりにおこる何気ない出来事にも、心から感動し、心にしみこませ、寄り添って生きていく、「涵養」、そして、目に見えない神様大自然、産んでくれた親御先祖様、生かされている社会、導いてくれたその道の先達、師、「神様」「親先祖」「社会」「師」の四つの恩に報いるように生きていく、これが、「三感四恩」です。

四つの恩に報いるように生きていくことこそ、前述の「随所主作」であり、そうすれば、「立所皆真」となるのではないでしょうか。

◇これから、「三感四恩」の生活を心がけられ、季節の移り変わりのように、少しずつ良くなっていく、コロナ禍の前に、「もとほる」、元のとおりとなる日々であり、ますますよすようにお祈り申し上げます。

第一八六号(令和四年四月二十二日)

◇私共は、災害と災害の間、「災間期」と、戦争と戦争の間、「戦間期」を生かされて生きていけると記述させていただきました。私共の生命には限りがありまして、悠久、気が遠くなるような古より、不老長寿を願ってまいりました。「有限の生」を、「無限の生」にかえてしまふことを、祈ったのです。これが、まさに、宗教に与えられたテーゼ、命題でもあると考えられます。私は、神社神道は、「つながりの宗教」であると思えます。目には見えないけれど、大切な大きな力、神様、大自然につながって、そして、人々とながって、運命共同体としての地域社会を作り上げていく、その営みこそが、神社神道なのではないかと思うのです。実は、私共が生活している現代は、目に見えている社会です。これを、現世(うつしよ)といいますが、神々の理想の世界を映している世だから、「うつしよ」と言うのだそうです。

しかしながら、世界に目を向けると、ウクライナの惨劇や新型コロナウイルスの蔓延等、神々の理想の世界から、かけ離れているのが現状のようです。経済の情勢も、「悪しき円安」の流れが止まりません。先行き不安なことばかりです。私共は、今ある命に感謝をし、謙虚に見つめ直し、希望を失わず、そして創意工夫する、「三つの目」を持つことが大事だと思います。一つは、大空から全体を見渡すことのできる、「鳥の目」。二つは、足元や細かいところも目配りできる、「虫の目」。さらに、三つは、世の中の流れを見極める「魚の目」。まさに、「三つの目」は、一昨年、私が提唱(ていしよう)している、敬神生活の心がけの「感謝謙虚、希望、工夫の四K」でもあります。「三つの目」、「四K」の敬神生活の心がけて、明るく豊かな暮らしを過ごしたいものです。

第一八七号(令和四年五月十一日)

◇神道は「つながりの宗教」であると記述しましたが、私は、さらに、「祓(はらえ)の宗教」でもあると考えます。祭典の前には、必ず、口を漱(すす)いで手を清める「手水の儀」があり、さらに、「修祓(しゅばつ)」という「祓の神事」を行います。このように、日本人は、「神州清潔(しんしゅうせいけつ)の民」と称し、心のあり方として「清らかさ」「潔さ」、そして、「清き明き誠の心」を大事にしてきたのです。これが、基本的な生活習慣、美德となつているのでありまして、感染症の罹患や蔓延を抑えているのではないかと推測します。

◇さらに日本人は、法的強制力のない「自粛要請」にも粛々と従ってまいりました。それも、歴史のなかで培われた国民性なのではないかと思えます。「十七条憲法の第三条に、「詔を承ては必ず謹め」とあり、また、国から出された法律の厳守を論じています。教育勅語にも、「常に国憲を重んじ、国法に遵ひ」と論じています。日本人は、歴史の中で遵法精神を徹底して鍛えられてきたのです。じつは、教育勅語の最終章には、「朕爾臣民と共に遵守すべきところ」と記されています。天皇陛下と国民が一つ、一体となつて教を守ってきたのです。カナダの御出身で、麗澤大学のジェイソン・モーガン准教授は、「日本の国体」と仰っています。紙に書いたルールではなく、心に書いたルールが社会秩序を守った」と述べられています。

◇まさに、神社神道は、私共の日本人に流れている「国体」といふべき、「心に書いたルール」を忘れない営みにほかならないのではないのでしょうか。まだまだ「変容の日々」が続きますが、「心に書いたルール」を消さないように過ごしたいものです。

第一八八号(令和四年六月十日)

◇正岡子規さんは「病牀六尺」に、「悟り」という事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つていたのは間違いで、悟りという事は如何なる場合にも平気で生きていける事であった」と書かれています。コロナ禍になつて三年目、社会的秩序を保ちつつ、「生活変容」を受け入れながらも、「平気で生きていく事」の大切さを痛感させられている毎日です。

◇総合地球環境学研究所の山極所長によりますと、「縁(えん)」には三つあるそうです。「地縁」、これは、「ふるさと」、「血縁」、家族とのつながりのことです。さらに、「社縁」、これは、勤務先である事業所、仕事とのつながりのことです。御先祖様から受け継がれた伝統的の神事を、元のお祭りのお祭りにしていかねばなりません。そして、三つの縁のつながりを深め、運命共同体としての地域社会を構築していかなければならないのではないのでしょうか。

◇今、日本は、「令和の黒船来襲」といわれています。幕末、吉田松陰先生は、萩藩主の毛利敬親公に「将及私言(しょうきつごん)という提言書を提出されました。その提言書には、「誠」には三つあると述べられています。「一に曰く実(じつ)なり二に曰く一(いつ)なり三にいわく久(きゅう)なり」と書かれています。私共は、明き清き誠の心を神様に捧げなければなりません。お祭りの「中身」を大切に、今、何を為すべきかに特化して、継続しなければなりません。それは、まさしく、「祭典の厳修」にほかなりません。襟を正して、「三縁(さんえん)」の絆を深める祭典の厳修、さらにその「祭典」の「もとほる」復元、継承につとめてまいる所存です。御自愛をお祈り申し上げます。

第一八九号(令和四年七月三日)

◇私共の身のまわりにおきる、ごく僅かな不幸な出来事や、病氣や怪我は、「罪」や「穢れ」からもたらされると考えられていました。その「罪」や「穢れ」を祓い清めて、幸せな日々を送りたいと願ったのです。茅の輪は、三回くぐります。左回り右回り、そして左回りです。「過去と現在をはかえられなくても未来は変えられる」、きつとよくなっていくという希望を見失ってはなりません。

◇日本国憲法の第十三条に幸福希求権が明記されているように、幸せを目指すことは人類共通の権利といえるでしょう。京都大学の広井教授によると、人類は、拡大成長期と定常成熟期を繰り返してきたそうです。現代は、第三の定常成熟期なのだそうです。実は、その拡大成長期は、物的な豊かさを目指した時代、定常成熟期は、心の豊かさを目指した時代といえそうです。「ないものねだり」の「拡大成長」から、感謝や謙虚の気持ち忘れず、常に希望を持ちつづける「あるものさがし」の「定常成熟」への転換ではないでしょうか。「幸せはいつも自分の心が決める」、詩人の「相田みつを」さんの言葉です。三回の茅の輪くぐり、一回目は、「してもらっている幸せ」感謝の気持ち、二回目は、「できるしあわせ」謙虚な心、三回目は、「してあげる幸せ」希望、三つの幸せを実感し、「幸福度のスキルアップ」、幸福度を高めるのが、この「茅の輪くぐり」なのではないでしょうか。「幸福度の高い者は樂觀的で視野が広い」、逆に「幸福度の低い者は悲観的で視野が狭い」という学術研究結果もあるそうです。「悲観は気分、樂觀は意志」です。幸福度を高めるといふこと、それは、すなわち「敬神生活の実践」にほかならないのではないのでしょうか。御自愛を祈ります。

第一九〇号(令和四年八月十三日)

◇上皇陛下は、平成の時代は戦争がなかった時代と仰いました。しかしながら、世界に目をむけますと、思想や宗教の違いからの争いが絶えません。戦間期ということは戦争と戦争の間の期間のこと、いいかえれば、平和な時間のことです。有史以来、世界中で通算した戦間期は、およそ二百年しかないそうです。天皇陛下皇族方は、広島長崎原爆投下の日、沖縄終戦の日、大東亜戦争終戦の日、日本人がけっして忘れてはならない四つの日として、熱い祈り、黙禱を捧げていらつしやいます。その四つの日の三つが、八月に集中しているわけですから、八月は、「鎮魂の月」といっても過言ではないと思うのです。

◇一つの国で一つの文明を持つ日本人らしさを取り戻さなければなりません。その一つが、死者への思いではないかと思えます。人は二度死ぬのです。一度目は、屍になった時、二度目は、その人を知っている人が一人もいなくなった時だそうです。だからこそ、生かされている私たちも、命がなくなった人、死者とも、共に生きていく、「共生」こそ、「魂の交流」であるし、日本人らしさではないかと思えます。◇私共は、「大自然を大切にする」、「人と人のつながりを大事にする」、「前向きに人生を楽しむ」、神社神道の信仰の三本柱を大切に生活をする、いわゆる、敬神生活を心がけなければなりません。神様の御加護を仰ぎつつ、感謝の心を忘れず、大自然の恵みに謙虚に向き合い、そして、希望を見失うことなく人々と支えあい暮らすことです。その三つ、「感謝」「謙虚」「希望」の三Kを意識して生活することが、「いのち」につながる、「幸せ」へと「つながる」道なので、日本人らしさのような気がします。

第一九一号(令和四年九月二十日)

◇九月は、別名、長月(ながつき)といいますが、なぜ、そのように呼ぶようになったのでしょうか。実は、古来より、「夜長月(よながつき)」の略でありまして、秋の夜長の頃という意味です。

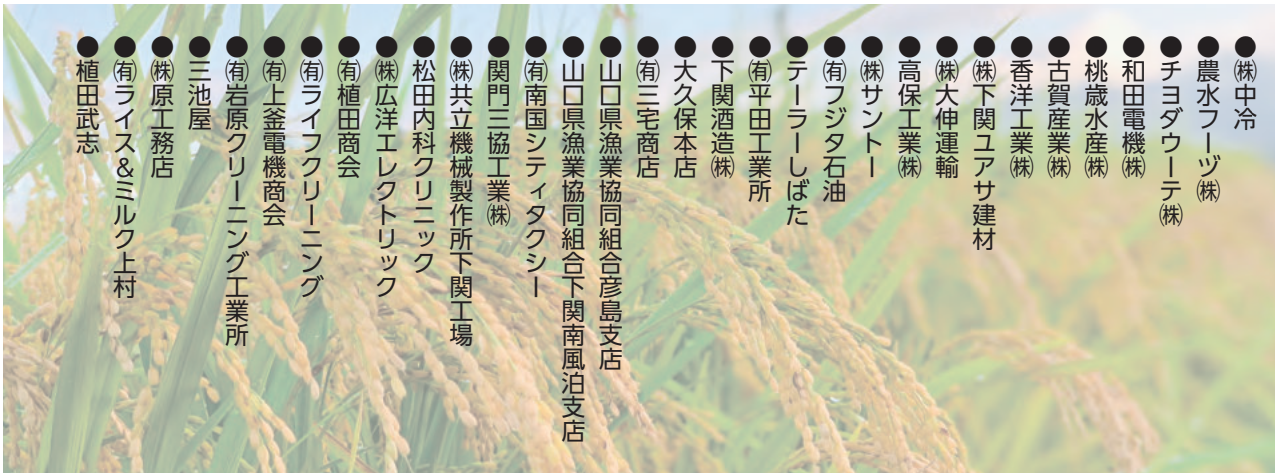
◇江戸時代の国学者である賀茂真淵さんは、稲作の収穫の時を迎えて、「稲刈月(いねかりづき)」の「い」と「り」が略され、「ネカヅキ」→「ナカヅキ」→「ナガヅキ」になったという説を唱えられました。本居宣長さんは、「稲熟月(いねあがりつき)」が訛って、ナガヅキになったという説を説かれています。

◇さて、その国学者のなかでも、塙保己一という方がいらつしやいました。七歳の時に失明されたのですが、十五歳の時に江戸に出て来られて、前述の賀茂真淵らに国学を学ばれました。七歳にして、「盲目」という、最早どうにもならない、変えようもない「さだめ」を背負ってしまった。しかしながら、目が見えないということが、もはや、不変の「さだめ」であるならば、耳で聞いて決して忘れないという道をすすまれて、大偉業を成し遂げられたのです。明治時代の文豪である幸田露伴(さん)は、「運命には、二つある。先天的運命と後天的運命である。」と述べられています。背負うべきものを背負う覚悟が決まった時に、後天的運命は、滑らかに動き出すのかもしれない。◇心静かに、謙虚に、自分の「さだめ」を見つめ直し、過去と現在を祓い清める、「外清浄」が、先天的運命、そして、希望を見失うことなく、前向きに、未来を清める「内清浄」が、後天的運命になるのではないのでしょうか。私共、「これから」の歩みが大切です。御自愛を祈ります。

第一九二号(令和四年十一月七日)

◇なぜに、先月発行が叶わなかったのか。それは、今をさかのぼること一年前、自宅玄関の縁石に躓き、転倒、あろうことか左膝の半月板を縦横に割ってしまいました。実は、先月の二十五日から、健康を取り戻した膝に、不要となった「ポルト」類を取り除く手術で再入院となり、六日間の入院加療ということで、発行の機会を逸してしまつたというのが、大きな要因の一つです。松下電器の創設者である、松下幸之助さんは、「うまくいったときは、おかげ様。失敗や、上手くいかなかった時は、身から出たさび。」と論じられました。私は、その二度に渡る通算三十三日間の入院生活の中で、実感したことがあります。それは、「幸せ」は、三つあるということです。一つは、「してもらう幸せ」、もう一つは、「出来る幸せ」、さらに、「してあげる幸せ」の三つです。

◇私たちは、「損か得か」という人間のものさしで判断してしまうのです。「産土百首」を著作された本田親徳という江戸時代の神道家は、「首に聞き眼にみえるもの」とこと産土神の御身にこそあれ」と詠まれています。今、目の前に起こるすべての出来事は、神様のお力によるものだ、恐れ敬い、謙虚に受け止めて、向き合うことが大切なのではないでしょうか。人生で意味のない出来事は、一つとしてないのです。しかも、いい出来事は、日々の暮らしのエネルギーになりますし、悪い出来事は成長の糧(かて)となりえます。「起きてくるものはすべてよし」と、「嘘か誠か」「正義か邪悪か」という神様のものさしで、向き合えば、神社神道の信仰の柱である、「前向きに人生を楽しむ」というところにつながるような気がします。私が、二度の入院生活で、「三つの幸せ」を実感したように。



令和四年正月
新年御供米料
奉献会社ご芳名 (※順不同、敬称略)

- (株)中冷
- 農水フーズ(株)
- チヨダウーテ(株)
- 和田電機(株)
- 桃歳水産(株)
- 古賀産業(株)
- 香洋工業(株)
- (株)下関ユアサ建材
- (株)大伸運輸
- 高保工業(株)
- (株)サントー
- (有)フジタ石油
- テーラーしばた
- (有)平田工業所
- 下関酒造(株)
- 大久保本店
- (有)三宅商店
- 山口県漁業協同組合彦島支店
- 山口県漁業協同組合下関南風泊支店
- (有)南国シテイタクシー
- 関門三協工業(株)
- (株)共立機械製作所下関工場
- 松田内科クリニック
- (株)広洋エレクトロニック
- (有)植田商会
- (有)ライフクリーニング
- (有)上釜電機商会
- (有)岩原クリーニング工業所
- 三池屋
- (株)原工務店
- (有)ライス&ミルク上村
- 植田武志



維蘇志会による「豆打ちの儀」

初めて設置した巨大お多福門を多くのメディアに取り上げていただき、疫禍にもかかわらず近年になく多くの参拝者で境内が賑やかになりました。「福豆のおわかち」千袋も多くの皆様に喜んでいただけました。

- 下関三井化学(株)
- 彦島製錬(株)
- キャボットジャパン(株)下関工場
- オルネクスジャパン(株)下関工場
- 池田興業(株)下関支店
- 三菱重工(株)下関造船所
- サンセイ(株)下関工場
- (有)前田造船所
- 日新リフレテック(株)
- 下関唐戸魚市場(株)
- 協立運輸商事(株)
- 西和建工(株)
- ALG合同会社
- ジャパンマリン(株)
- 青木鉄工(株)
- (株)大田造船
- (株)田原工務店
- (株)ユキテクノ
- (株)大庭工務店
- タナカ機工(有)
- (株)山口銀行彦島支店
- (株)西京銀行彦島支店
- 西中国信用金庫福浦支店
- ファミリーマート迫町店
- (株)ナカハラプリンテックス

令和四年二月三日
節分祭
御協賛会社御芳名 (※順不同、敬称略)



夏越大祓管拔神事



奉賛会による茅の輪奉製

茅ノ輪の奉製や御神輿を奉じて彦島氏子地域の御神幸祭を厳修致しました。皆様方のおかげと工夫をもちまして滞りなく執り収める事が出来、感謝申し上げます。

- 下関三井化学(株)
- 彦島製錬(株)
- キャボットジャパン(株)下関工場
- 西中国信用金庫
- 三菱重工(株)下関造船所
- サンセイ(株)下関工場
- 日本歯科薬品(株)
- 日新リフレテック(株)
- 下関唐戸魚市場(株)
- 山口県漁業協同組合彦島支店
- 山口県漁業協同組合下関南風泊支店
- (株)タカツキ

令和四年七月二十日
夏越祭
御協賛会社御芳名 (※順不同、敬称略)



下関三井化学(株)
 池田興業(株)下関支店

【臨時駐車場提供】

【福引大会協賛】

- 彦島製錬(株)安全協力会
- (株)下関酒造
- 【物産奉納品】
- (有)もずくセンター(もずくスープ)
- (有)マルイチ彦島醸造工場(彦島みそ)
- 桃歳水産(株)塩わかめ
- (株)蔵流本舗(蔵流焼き・おそいぞ武蔵)

令和四年十月二十三日
秋季例大祭
奉納ご協賛会社御芳名 (※順不同、敬称略)



左から先舞役 和田剛氏、後舞役 可知重成氏、止役 和田治仁氏

昨秋斎行されました秋季例大祭をフォトメッセージジャー中野英治氏撮影の写真を中心に振り返ります。福引大会をはじめ三年ぶりとなる神賑行事も執行でき境内が賑やかになりました。

無形民俗文化財
秋季例大祭
『サイ上り神事』 斎行
令和四年十月二十三日(日)



氏子小学生が獅子人役として榊の葉を口にし御神殿3殿に1升餅重を献饌する



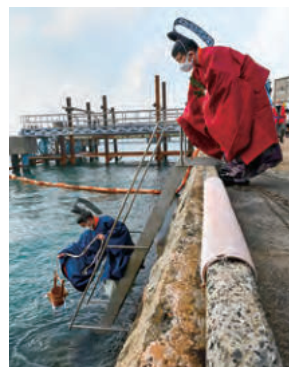
例祭記念花手水



例祭記念花手水



下関三井化学(株)様構内を進む御神幸祭の隊列



柴田禰宜が海水を汲み上げ斎行される潮搔神事



サイ上り神事祝詞奏上



トビコ(飛魚)役で海面を舞う姿を披露する氏子小学生



3年ぶりに猿田彦大神役を奉仕した福田寛氏



御神体である八幡尊像が彫られた明鏡を海底から引き揚げの様子

「まほろば学級」三年ぶりに開講

令和四年八月(日)



「子どもたちに 多く食文化を伝えたい」

株式会社畑水産

代表取締役 畑 栄次

この度、御神縁をいただき第十五回目の佳節を迎える「まほろば学級」の講師を初めて務めさせていただきました。弊社は、創業六十四年以來、多種の河豚を取り扱い、ふく一筋に商いをしてまいりました。仲卸問屋です。その商いをさせて頂いている場所は、日本唯一河豚専門市場南風泊市場に程近く、彦島八幡宮は氏神様にあたります。お陰様で御加護のもとに今日があり、見守って下さる八幡様に何かしら恩返しをと思っております。親交ある山本権彌宜さんの御計らいで、この度の貴重な機会をいただきました。直近の県内感染急拡大で、開校が危惧されていましたが「私は参加の児童一人でも是非開催していただきたい」旨を宮司さんに伝えていました。当日七名という少数ではありますが、無事に全日程を終了し、私は午前の部を担当しました。私は現在、下関の「ふく食文化」を普及・浸透させる為に、様々な仕掛けを模索しております。その中で、この度の機会をいただき、先人たちが英知を積み重ねてきた「ふく食文化」を先ずは地元の子どもたちに知っていただきたい、その一心でお話をさせていただきました。実際にふくの捌き方の実演や、部位の説明、セリの様子など参加児童の皆さんは目を輝かせて熱心に聴いて下さいました。同じ志を抱く仲間である寿し処ひのき店長 山崎貴氏ととらふくの握りを子どもたちと一緒に握る、彦島瑞鳳殿魚正本店店長 辻野正太郎氏がふくの薄造りを披露する、一連の連携により昼食はふく刺し・ふくの唐揚げ・ふく握りとふくづくしでした。一般的に河豚はふくと呼びますが、私なりに「毒のあるうちはふくで、毒を取り除いたら濁点を取ってふく」と言い換えています。先入観で高級魚のイメージがありますが、食育の観点からも身近で親しみやすさを体感していただき、何より皆が美味しい、美味しいと残さず食べてくれた事が大変嬉しく思った次第です。若年層の魚離れは、魚介の宝庫ともいえる下関でも深刻です。河豚の本場、河豚の聖地と呼ばれるからには誇りを持って「一番の好物は、ふく！」という街にならなくてはなりません。その為には、子どもたちにもふく食文化に触れる多くの機会を設けるべく、今後も微力ながらその一翼を担わせていただきます。



寿し処ひのき 山崎店長の指導により 自分たちでふく寿しを握る様子



ふくをさばく畑社長



氏子青年会「維蘇志会」の指導を受けての 火起こし体験の様子



参加児童の手によって奉製された花手水

先ずは神恩感謝を心掛け、「命をいただく食に感謝」を念頭に、しっかりと足を付けて、前向きに日本全国、世界へと「ふく食文化」の普及・浸透に一意専心努めて参る所存です。地に足がついてなければ背伸びもできないように、創業以来の理念を礎に地元根差した活動を展開していきたいと思っております。結びにこの貴重な機会をいただきました関係各位に厚く御礼申し上げますと共に、彦島八幡宮の弥栄とまほろば学級の御発展を衷心よりご祈念申し上げます。

『楽しかったまほろば学級』

中村 優希

わたしは、初めてまほろば学級に参加させていただきました。当日までは、どんなことをするのだろうとワクワクドキドキしていました。

わたしが印象に残ったことは、全てなのですが、とくにあんどん作りと、火起こしが楽しかったです。あんどんと火起こしの道具は、昔の人が使っていたようで、今でいう懐中電灯やライターです。あんどんは、好きな絵を描いて自分好みのできるの、なかなかうまくできたと思います。火起こしは、けむりはたけど火はつかなかったの、むずかしかったです。昔の人はそんな大変なことしているのだと知ることができました。

また、花手水製作やお寿司屋さんに教えてもらって自分で作った河豚の握りなどフク料理をいただいたり、絵本を読んでいたりと、とても貴重な体験をさせてもらいました。ありがとうございました。また来年も参加したいです。

『まほろば学級に行つて』

板崎 莉音

今回、まほろば学級に、初めて行きました。彦島八幡宮には、何回もお参りに行つていて、毎回花手水の写真をママがとっています。でも、自分たちで花を浮かべたことはなかったので、とても楽しかったです。開校式では、代表で玉串拝礼をしました。なかなかない経験だから、緊張しました。ふくは、学校で回だけふく鍋がでたことがありました。からあげもお寿司もふくさしも、全部美味しかったです。ふくをさばいているのを見るのも、お寿司をにぎったのも初めてでした。

あんどんをつくらったのも初めてでした。終わりが午後五時までだったので、あんどん行列はできなかったけれど、あんどん作り、とても楽しかったです。最後に、火起こしです。いまは、火をつけるのは、ボタンを二つおすだけで火がつくけど、昔は、まさつたを使って時間かけて、火をおこしていたと知りました。昔の人は、いろんな方法を試したり、大変なことと時間をかけてやっていると考えると、すごいなあと思いました。私たちは、火をおこせなかったけど、大人の人でついでに、「へえ、火がついたら、あんどんかきなつかあ」と思いました。

初参加のまほろば学級で、初めてやったことや、初めて食べた物など、いろいろな「初めて」があったので、とても新鮮で楽しかったです。そして、わたしは次のまほろば学級(十六回目のまほろば学級)も参加したい!と思いました。今回のまほろば学級は、七人で少なかったみたいだけど、多いときは三十人、四十人くらいいるといわれて、そんなにいっぱいいたの?とビックリしました。コロナウィルスのせいで、いろんなことができなくなったり、延期や中止が多かったりすることが多いから、楽しみにしていた、まほろば学級が中止、延期にならなくてよかったです。

奉納

大千支絵馬

「大千支絵馬を制作して」

今回初めて、彦島中学校美術部で、「大千支絵馬」の制作をすることになりました。私たちは、最初はどんな絵馬にしたらよいかまったく想像が付きませんでした。そこで、制作をすることになった四人で、色々な絵馬を調べました。どんな絵馬にしたら彦島八幡宮に参拝されたみなさんに、彦島を感じてもらえるのか、また、参拝されたみなさんに元気を与えられる絵馬にするためにはどんな絵馬がふさわしいのか考えました。

悩んだ末に、彦島の海を描き、干支の卯の親子が元気に跳躍している様子を描くことにしました。他にも、お正月の神社に飾るものなので、梅の花を入れて華やかに仕上げました。他に工夫したところは、文様を入れて和風に仕上げたところです。
大絵馬を作った感想は、こんな大きな作品を手がけたのは初めてだったので、描くのが難しかったし、緊張しました。でも、四人で協力して作ることができて、とても楽しく貴重な経験となりました。
彦島八幡宮に多くの方が参拝し、私たちの描いた絵馬を見て、彦島らしさを感じたり、元気になってくださったりしたらとても嬉しいです。

下関市立彦島中学校 美術部二年

西村美音 森永心奏 山中陽夏 萬年莉乃



下関市立玄洋中学校 美術部

先生から以来の内容を聞いて、とてもびっくりしました。普段とは違うものを描くことになり、とても貴重な時間になると思いました。このような経験をさせていただき、本当にうれしく思います。

部長三年 江本 未来

大変なことになったと思いました。引退の年にするものを描く仕事をいただきました。小学生の頃は、いつも八幡様の広い駐車場が遊び場でした。見守ってくださいました八幡様に、感謝の気持ちをこめて描きます。

三年 白石 樹

このたび、彦島八幡宮様の大きな絵馬を描かせていただくことになりました。私は、毎月一日に父と参拝させていただいたり、御朱印も何回もいただいたりしているのですが、絵馬を描かせていただけると聞いたときは、驚きとうれしさでいっぱいになりました。絵馬の見どころは、うさぎがびんぽーっ！としているところです。

二年 大元 奈緒

まさか絵馬を描かせていただくことになるとは思いませんでした。小さいときから、初詣やお祭りで何度もお参りしたことのある八幡宮ですが、美術部に入学したら、こんなご縁をいただきました。

一年 井伊 遙香

緊張と戸惑いと畏れの中、謹んでお受けいたしました。早速皆で参拝し、社殿などを取材し、花手水を配した「跳卯遊花園」が完成いたしました。丑寅の角には厄除の南天を置きました。地域の皆様方の笑顔が増えるものになれば幸いです。つながりをもつ機会をいただきましたことに感謝申し上げます。新しい年寿がむらさきながらも跳ねあしたこの光もて来よ

顧問

神宮大麻全国頒布百五十周年

「啓発標語最優秀賞」「神棚に 今日も家族の ありがとう」

伊勢の神宮の御神札（神宮大麻）をお拝受しましょう

明治天皇の思召しにより、明治五年から日本国の総氏神お伊勢さまの御神札「神宮大麻」が全国的に頒布が開始され百五十周年の佳節を迎えました。

「神宮大麻」の歴史は古く、伊勢のと呼ばれる神職が祈禱し祈願をこめて各地へ赴き頒布していた「大祓大麻」に由来します。

現在の神宮大麻は伊勢の神宮でお清めを受けた奉製員により一体 体心を込めて奉製され、年末に氏神様の御神札と共に全国の神社で頒布されています。日毎朝夕に、神様に先祖様に感謝し祈りを捧げる日本人の暮らしの原点が御神札を祀る事にあります。

伊勢の神宮は「日本の守り神さま」「心のふるさと」であります。御神札を通して「お伊勢さま」をご自宅から心のより所と感じ、おじいちゃんおばあちゃんは、日々神棚に手を合わせお参りする暮らしを受け継いで私たちに繋いでくれました。これが、私たち日本人が神仏や先祖様を大切にしてきた本来の姿であります。次世代へこの大切な心を繋いでいく為にも、ご家庭に神棚をおまつりし、おかげさまの感謝の心で日々を過ごしていただきたく思います。是非、ご家庭に神棚・御神札をお考えの方は、お気軽に氏神神社様、ご神縁をいただいた神社様、お近くのお宮さんにお尋ねになつて下さい。

伊勢の神宮写真真展開催のご報告

令和四年三月一日〜九日（神社会館 彦島瑞鳳殿）

山口県神社庁主催、神道青年全国協議会協力のもと、山口県で初の開催となる、プロの写真家による神宮の四季折々の風景、祭り、伝統行事の写真が展示され、多くの拝観者の方にご来場賜りました。伊勢の神宮を「やまぐち」で感じていただきました。



八幡様の知恵袋

旧暦とは「太陽暦改暦から百五十年」

現在我々が使用している暦は、明治五年、明治天皇様の思召しにより「太陰暦ヲ廢シ太陽暦ヲ行フ附詔書」が渙発され、太陽の動きをもとにして作られた一般的に「太陽暦」と呼ばれます。しかし太陽暦への改暦直前まで使用されていた天保暦（幕末二十九年間使用）は月の満ち欠けをもとに、季節をあらわす太陽の動きを加味して作られた「太陰太陽暦」と呼ばれるもので、一般的に「旧暦」と称されます。

旧暦を含む太陰太陽暦では、月が新月になる日を月の始まりと考え、各月の一日としました。

新月から新月までは平均して約二九・五日の間隔なので、一年間では約二九・五日×十二ヶ月＝約三五四日であり、太陽暦の一年より約十二日短い為、そのままでは徐々に誤差が生じ季節とずれてしまいます。そこで太陰太陽暦では、暦と季節のずれが大きくなり、ひと月分近くなると、閏月を入れて、ずれを修正していました。例えば、三月の次に閏月が入るとその月は「閏三月」と呼ばれ、その年は十三ヶ月間あるということになります。閏月は平均すると十九年に約七回の割合で入ります。

以上のような理由から、太陰太陽暦では同じ日付であっても、それを現在の暦での日付に換算すると、年毎に違う日付になります。例をあげると、現在の暦に切り替わる前の、明治三年一月一日（元日）は、現在の暦では二月一日ですが、翌年、明治四年二月一日（元日）は、現在の暦では一月十九日となります。

現在では「旧暦」という考えもごく一部でしか見聞きしなくなりましたが、斯界（神社界）では太陰太陽暦のもとで行われていた祭祀・慣習・文化を継承し、我々の生活の中で、いまなお生き続けています。身近なところでは、長門國二宮住吉神社様では「和布刈祭」が旧暦元日に斎行され、その他全国的に多くの神社で「中秋の名月（観月祭）」を旧暦八月十五日、当宮におきましても、兼務社では農業や漁業に関する古来からの特殊神事は旧暦を遵守して厳粛に執行致します。

このように古来からの伝統祭祀・慣習・文化の意義や守り伝えられてきた心は、これからも重く受け止め、受け継いでいく使命があると思います。今年是非、旧暦を意識して過ごしてみませんか？感慨も一段と深くなるかもしれません。

舟島神社

舟島神社の再建について(御礼)

彦島自治連合会 会長 二見 勝敬

皆様 新年明けましておめでとうございます。私たちが彦島自治連合会は、彦島八幡宮奉賛会の中心メンバーとして、彦島八幡宮の大神様にご奉仕させて頂いて頂いておりますが、同時に巖流島にある舟島神社を主祭させて頂き、毎年佐々木小次郎命日の直前の土曜日に例祭を齎行させて頂いております。

さて、昨年の『産土』で、彦島自治連合会が主祭する舟島神社の再建を皆様と呼びかけましたところ、彦島にて事業を展開している企業様、彦島にお住まいの皆様、その他大勢の方々からご奉賛を頂き、昨年4月に再建工事を完了することが出来ました。これも皆様

方のお陰と感謝申し上げます。ところで、皆様方にご奉賛のお願いにお伺いした際に、『巖流島に行ったことがありますか?』とお聞きするなかで、残念ながら90%以上の方が巖流島には行った事がありません、巖流島は彦島に属しているの?など、地元の方々の巖流島に対する現況・認識にびっくりしました。

幸いにも、皆様に頂いたご奉賛が予想外に集まり、又、工事費も業者様のご協力を頂き、多少余裕が出ておりました。そこで、彦島にある5つの全小学生とその保護者様に巖流島に行つて貰うこと、巖流島でスケッチ・写生したものを、今後の巖流島等のPR用として使用させて頂くことを目的に、巖流島渡航の往復ペア券を贈呈致しました。皆様にも今年は是非とも巖流島にお越し頂き、舟島神社にご参拝頂きますよう、ご案内申し上げます。



八幡さんの思い出写真

今号は昭和三十年代の当八幡宮周辺の空撮写真です。現在の境内公園の場所に溜池が存在していました。また境内周辺には、近隣化学工場(現、下関三井化学株)の官舎や社宅が密集し、当時多くの氏子住民が住んでいたことがうかがえます。



異動報告(神社役員)

令和四年十二月一日付

【昇任】責任役員 柴崎 眞二

奉納 祖霊殿襖総張替え

宗旨が神社神道の家々で構成する彦島八幡宮神道会(世話人代表 川脇保)の皆様により祖霊殿の襖張替えをご奉納賜りました。衷心より御礼申し上げます。



訃報

彦島八幡宮責任役員 小熊坂 孝司氏

(令和四年十月七日逝去)

長年にわたり当宮の要職を務められ御神徳の宣揚に一方ならぬご尽力を賜りました。茲に生前の御功績を偲び謹んで衷心より哀悼の意を表しますとともに御冥福をお祈り申し上げます。令和四年「秋の叙勲」で瑞宝双光章を受賞されました。

みずのとう
令和5年(癸卯)厄年・年祝表

(年祝)

上寿祝	大正13年生(100歳)	数え年100歳のお祝い。
白寿祝	大正14年生(99歳)	百から上の一を取ると白になり、数で云えば99である。
卒寿祝	昭和9年生(90歳)	卒は略字で卒と書き九十と読む。
米寿祝	昭和11年生(88歳)	米は字をわけると八十八となる。
傘寿祝	昭和19年生(80歳)	傘は略字で傘と書き八十と読む。
喜寿祝	昭和22年生(77歳)	喜は草書で喜と書き七十七と読む。
古稀祝	昭和29年生(70歳)	「人生七十古来稀なり」の漢詩にもとづく。
還暦祝	昭和38年生(61歳)	干支が丁度一巡し、誕生の年と同じになるので本卦返りともいう。

※節分祭(2月3日)までに厄祓をお受けしましょう。

(厄年)

性別	年齢	前 厄	本 厄	後 厄
男	25歳	平成12年生(24歳) たつ	平成11年生(25歳) うさぎ	平成10年生(26歳) とら
	42歳	昭和58年生(41歳) いのし	昭和57年生(42歳) いぬ	昭和56年生(43歳) とり
	61歳	昭和39年生(60歳) たつ	昭和38年生(61歳) うさぎ	昭和37年生(62歳) とら
女	19歳	平成18年生(18歳) いぬ	平成17年生(19歳) とり	平成16年生(20歳) さる
	33歳	平成4年生(32歳) さる	平成3年生(33歳) ひつじ	平成2年生(34歳) うま
	37歳	昭和63年生(36歳) たつ	昭和62年生(37歳) うさぎ	昭和61年生(38歳) とら

ほっほうふさ
(八方塞がり)

皆様一人一人の生年月日により九つの星“九星”に区別され星回りが存在します。中央を基点に、北、北東、東、南東、南、南西、西、北西の方角をめぐる、九年に一度中央に入ります。これが八つの星(方位)に囲まれた状態である**八方塞がり**です。不安定な年とされ、より注意を払う必要のない年です。

八方除けの祈願や方位除けの御守をお受けになられ、御神慮を恐み慎む事をお勧め申し上げます。

本年は**四緑木星**の方が該当致します。(※以下に表記)

昭和8年、昭和17年、昭和26年、昭和35年、昭和44年、昭和53年、昭和62年、平成8年、平成17年、平成26年

(三月金神様の方位) 三月金神様(三ヶ月ごとに方位を変えられる神様)の方位への移転新築増改築開店等々留意しなければなりません。

北	令和4年10月25日～令和5年1月21日	東	1月22日(旧元日)～5月19日
南	5月20日～8月15日	西	8月16日～11月26日

(七五三祝)

髪置祝	令和3年生の男女(3歳)	髪を伸ばし整え始めること。
袴着祝	平成31年生、令和元年生の男子(5歳)	男の子が初めて袴をはき始める年齢。
帯解祝	平成29年生の女子(7歳)	女の子が今までの紐付着物から帯を締める大人の着物に替える年齢。

(天赦日一覧)

1月6日(一粒万倍日)、3月21日(一粒万倍日)、6月5日、8月4日(一粒万倍日)、8月18日、10月17日

祈願祭(お祓い)は数え年でお受けしましょう。

「数え年」は、生まれた時点から1歳とし、新年を迎える度に1歳加えて行きます。これは、正月に各家を訪れる年神様から1つ年を頂くというありがたい意味があります。満年齢に誕生日前であれば2歳、誕生日を迎えた後は1歳を加える解釈となります。

編題発
集行
者字者

山柴
本田
光宜
徳夫

発行所

彦島八幡宮社務所

〒511-0209 彦島町五丁目十二番九号
TEL 089-483-1126
FAX 089-483-1107
ホームページ <http://www.hikoshima-guunet>

印刷・(株)ナカハラプリントクス



こやすはちまん
安産祈願祭・腹帯清祓のご案内 (令和5年の戌の日)

彦島八幡宮は別名『子安八幡』とも称され、安産の神様としても崇められ、県内外よりご参拝いただきます。ご持参頂いた腹帯(マタニティガードル)に当宮の「安産守護之印」を押印させていただきます。



1月 4日(水)	4月 10日(月)	7月 3日(月)	10月 7日(土)
16日(月)	22日(土)	15日(土)	19日(木)
28日(土)	5月 4日(木)	27日(木)	31日(火)
2月 9日(木)	16日(火)	8月 8日(火)	11月 12日(日)
21日(火)	28日(日)	20日(日)	24日(金)
3月 5日(日)	6月 9日(金)	9月 1日(金)	12月 6日(水)
17日(金)	21日(水)	13日(水)	18日(月)
29日(水)		25日(月)	30日(土)

★お子様の命名書、宮司が浄書致します。お気軽に社務所迄お申し出ください。授与された命名の掛け軸をご持参下さい。お持ちでない方も、半紙や色紙等に謹筆致します。